A.クルックハルト：葦の歌

アウグスト・クルックハルトは 19 世紀に活動したドイツの作曲家、ピアニスト、指揮者。十代の頃から作曲を始め、リストやワーグナーの影響を強く受けていたが、のちにはシューマンなどの作風へと近づいていった。1872 年に作曲したオーボエ、ヴィオラ、ピアノのための「葦の歌」（全 5 曲）は、19 世紀前半のオーストリアの詩人ニコラウス・レーナウの同名詩集にインスピレーションを得た幻想小曲集。レーナウは若くして精神を病み、シューマンと似た最期を遂げている。クルックハルトはレーナウの詩句をなぞるように、その情熱的なイメージを表現している。

F.ブリッジ：弦楽六重奏曲

20 世紀前半に活躍したイギリスの作曲家フランク・ブリッジは、一般にはベンジャミン・ブリテンの師として知られているが、近年はその室内楽作品が再評価されている。音楽家の父からヴァイオリンの手ほどきを受け、ヴィオラに転向したのち、ヨアヒム四重奏団に加わったこともある。1912 年に完成した「弦楽六重奏曲」（ヴァイオリン 2、ヴィオラ 2、チェロ 2）は全 3 楽章構成。主要な主題はロマンティックだが、時に前衛的な響きが顔をのぞかせ、和声は一聴して個性的な刻印を帯びている。

F.ワインガルトナー：ピアノ六重奏曲

フェリックス・ワインガルトナーは貴族の家系に生まれ、リストの弟子として将来を嘱望された音楽家であったが、今日ではおもに指揮者として知られている。マーラーのあと、1908 年からおよそ 19 年にわたりウィーン・フィルの常任指揮者として活動し、次世代のフルトヴェングラーへと引き継いだ。作曲家としては、7 曲の交響曲を筆頭に、オペラ、管弦楽曲、室内楽曲など多くの作品を残した。1902 年に作曲した「ピアノ六重奏曲」（全 4 楽章）は、通常の弦楽四重奏にコントラバスとピアノを加えた編成を採用している。演奏時間 40 分を超える大曲で、甘美な旋律と堅固な書法でロマン派の息吹を伝える作品となっている。